

---

\*センターへの要望や提言を、という要請に応じて寄せて下さいました原稿を掲載させていただきます。

## 《言語センターに望むこと》

▶今回は、言語センターの組織、運営、活動その他すべての面にわたって改めて確認し、自分なりの考えを出すことが望まれているのかもしれない。だが、時間も限られ、与えられている紙幅も限られていれば、センターと学生とのかかわりに的をしぼり、一般外国語の教授者としての立場から思いつくままに二、三の要望を述べることでお許しをいただきたい。言語センターがかかわりを持つ「学生」は三種類いる。これから大学で外国語およびその文化を学ぼうとする学生、学んでいる学生、地域社会で学びたいと思っている市民。

学んでいる学生のためには、常に外国語教育の質、視聴覚教室のハード、ソフト両面の質の向上が計られなくてはならない。具体的に提案したいのは、学科による講演会が開催されているように、毎年一つだけでも学科以外の言語文化の講演会やシンポジウムをセンター主催で開催してほしい。さしあたって来年は（いつまでも）近くて遠い国、韓国を取り上げるとか…。

また大学が「開かれた大学」を目指している以上、言語センター独自のテーマをもって、市民講座の中に参画していくべきではないか。世

界の中の日本、国際社会の中の神奈川大学という意識をもっとも鋭敏に表明できるのが、言語センターではないのか。

問題としたいのは、これからどの外国語を履修しようかという新生である。我らが神奈川大学はわずかな時間のガイダンスを行うだけで、この点について十分な指導をしていない。この言語はどのような文化体系にあるのか、この外国語を学ぶとどういうメリットがあるのか、新生は具体的に知らされる機会なしに履修届を出すのだ。せめて独語、仏語、露語、西語、中国語、朝鮮語についてのガイダンス特集のようなニューズレターを新生に配布することはできないのか。大学事務局の手に余る（らしい）こういう部分に、言語センターが手を伸ばしてもらいたい。

センターに所属する教職員の人数も、それぞれがセンターにかけられる時間も限られているのだから、拡大志向であれこれと提案しても仕方がない。もっとも基本的で重要なことを確実に、堅実にやって行こう！

（佐 藤）